



巻 頭 言

光 学 屋 雑 感

波 岡 武*

かつて20年間にわたって、毎年2回発行されていた光学特集号が応用物理学会誌から姿を消してもう13年余になる。たしか、毎号どれをとってみても、光学特集号と大差ないほど光学関係の記事が多く、特集号と銘うって特別に企画編集する必要性が薄れてきたというのが、廃止の理由の一つであったと思う。光学が広い分野で根を張り、枝を伸ばしたためと理解すれば、こんな嬉しいことはないし、光学の将来にとっても大変喜ばしいことである。たしかに、光産業、光通信、オプトエレクトロニクス、メカノプティクス、光コンピュータ、X線リソグラフィ、……といった言葉で代表される先端技術分野に光学が強くかかわっている事実をみると、なるほど光学も盛んになったものだという気になってしまう。その気になってしまうだけでなく、これらの諸分野で光学が担っている役割の重要性は紛れもない事実である。

しかし、それでは誰がこうした分野を開拓してきたのかと聞かれたとき、光学屋が胸を張って「我々ですよ」と言えるだろうか。一步さがって、それらの分野で活躍している人達に「あなたは何屋さんですか」と聞いたとき、何パーセントの人達が「私はもちろん光学屋ですよ」と誇らしげに答えてくれるだろうか。翻って、光学屋を養成する立場にある大学はというと、これまた実に寒い状況にある。かつてはどの大学でも光学の講義があったのに、今では専門課程で光学を教えているところは十指に満たないのではなかろうか。大学だけでなく、高校の物理の教科書を見ても、光学には雀の涙ほどのスペースしか与えられていない。小学校から大学に至るまで、今日ほど光学が教育の場で不当な処遇をうけている時代はないのではなかろうか。

こんなにも大切な光学が、一体どうしてこんな有様になってしまったのだろうか。ここに日本の光学屋の今日の問題があり、過去の栄光の幻としてしかみられていないところに現在の日本の光学の問題がある。それでは光学屋はどうすべきか、などといった大それたことを言うつもりはない。ただ、光学屋たるものは、光学本来の基盤のうえにしっかり根を張ったうえで、光学という古くて新しい学問に新鮮な息吹きを吹き込み、現状の打開と新分野の開拓に積極的に取り組んでゆく気概と勇気が今もっとも必要なのではなかろうかと考え、諸賢の御一考をわずらわたく、ここに問題を提起した次第である。